

この世界は、弱肉強食だ。

ダンジョンが出現して半世紀——俺はその頂点に立つ探索者として、今日も配信画面の向こうの信者たちに向かって微笑んでいた。

「よし、電波も問題なし。……聞こえてるか？ 今日とは特別な配信だ。感謝しろよ、お前ら」

ダンジョンの薄暗い回廊を、不釣り合いなほど煌びやかな照明ドローンが照らし出す。カメラの中心にいるのは俺、神代玲。現役にしてS級の称号を持つ、最強の魔法剣士だ。

コメント欄が滝のような勢いで流れていく。

『玲様あああああ！！』

『今日の衣装エッチすぎませんか!?!』

『太ももの絶対領域に挟まれない』

『¥50,000 靴舐めさせてください！』

「おい、変なコメントつけてスパチャ投げるな。『芸術的』と言え。……まったく、お前らは本当にこういうの、好きだよな」

呆れたようにため息をつきつつ、俺はマントを翻す。

今日の衣装は、リスナーからの要望で作らせた特注品だ。『

ホステシア ピルグリム

聖女 の贖罪 』——黒髪に映える金の鎖と、申し訳程度の白い聖布で構成された儀礼装。乳首と股間をギリギリ隠す金属製の装飾が、動くたびに危うくカメラに映りそうになる。くそ、これ完全に食い込んでるじゃないか。鎖が肌を這う感触が妙に生々しい……。

けど、カメラの前でそんな動揺は見せられないしな。

防御力は皆無に近く、俺の魔力を糧に発光するエフェクト付きだ。まあいい。どうせ雑魚相手の舐めプ配信だ。

「このダンジョン『深淵の苗床』は——」

言いかけて、俺は眉をひそめた。苗床。魔物の繁殖地を意味する、趣味の悪い名前だし、不吉すぎる。

俺はつとめて明るい声を出した。

「……物騒な名前だが、所詮は中級帯だ。入場料だけで億がかかる未踏破エリアだが、お前らの莫大なスパチャのおかげで貸切にできた。今日は最奥のボス部屋まで、俺の華麗な剣技をたっぷり見せてやる」

カメラに向かって流し目を送ると、同接数がまた跳ね上がった。

『神』

『抱いて』

『¥100,000 一生ついていきます』

ふっ、と笑みが漏れた。

富、名声、力。そして俺を崇拜する数百万の信者たち。この世界は弱肉強食だが、俺は紛れもなく頂点に立つ側だ。そう——今日のこの瞬間まで、俺は本気で信じていた。

『目標額達成まであと少しですね』

『いよいよ収穫祭か』

『長かった……5年かけて育てた甲斐があった』

『玲ちゃん、今日はたっぷり「還元」してね♡』

コメントの流れが、妙に統制されていた。

いつもの雑多な熱狂とは違う。まるで、あらかじめ示し合わせていたかのような——

(……なんだ、この違和感)

背筋に冷たいものが走ったが、もう引き返すには遅すぎた。



異変が起きたのは、ボス部屋に足を踏み入れた瞬間だった。重厚な扉が轟音と共に閉まり、魔法的なロックが掛かる。

「……あ？ なんだ、イベントか？」

余裕ぶって振り返った俺の身体に、突然、強烈な重圧がかかった。ガシャンッ、と音が鳴る。身につけていた『聖女の贖罪』の鎖が生き物のようになねり、俺の頭上で交差し、両手を縛り上げた。さらに足首に絡みついた鎖が両足を左右に大きく引っ張り、強制的に股をひらかせる。無様な『大の字』の姿勢で空中に固定された。

「ぐっ、う!? な、なんだこれ……外れ、ない!？」

魔力を放出して弾き飛ばそうとするが、魔力は鎖に吸い取られ、逆に拘束が強まるだけだ。

バランスを崩し、無様に床に膝をつく。

カメラドローンが、慌てる俺の顔を至近距離で捉える。

「おい運営、装備のバグだ。配信止めろ！ ……おい、聞いてんのか!？」

叫ぶ俺の目の前に、無機質なシステムウィンドウがポップアップした。

【クエスト条件達成:目標達成額 5 億円到達】

【リスナー権限により、ダンジョンギミック『強制発情・拘束モード』を起動します】

「は……？ え、……目標達成額……？」

声がうわずる。目の前の文字列が意味のある情報として脳に入っていない。

リスナー権限？

強制発情？

何を言っているんだ。俺はS級だぞ。ダンジョン攻略の主導権は俺にあるはずだ。

これは何かの悪い冗談か？

あるいは高度なドッキリ企画か？

だが、締め上げられた手首の食い込みと、無理やり広げられた両足、あられもない恰好が、これは紛れもない現実だと告げていた。

そして、コメントの雰囲気が一変した。

『きたああああああああああ！！！！』

『ついにS級様のメッキが剥がれる時が来たwww』

『5年間、よく我慢したな俺たち』

『今まで貢いだ分、体で返してもらうからな^^』

「お前、ら……何を、言って……？」

信者だと思っていた。

俺を崇めていると思っていた。

だが、流れるコメントは嘲笑と欲望に満ちみちていた。

『なあ玲くん、今どんな気持ち？www』

『最強(笑)の魔法剣士サマが、無様に股開いてる気分は？』

『その格好、お前が一番嫌いな「汚い」って言葉がぴったりだな』

「黙れ……！これはファンサービスで……」

震える手で鎖を外そうとするが、ビクともしなかった。薄暗いボス部屋に、鎖がこすれる音だけが無慈悲に響く。

『俺たちが頼んだのは「お前を壊す道具」だよ』

『その衣装、開発費3億かかったんだぜ？感謝しろよ』

「……ドッキリならもういいよ。十分ビビったから」

ほら、と俺は引きつった笑みを浮かべ、カメラに話しかける。

だが、返ってきたのは冷酷な真実だった。

『ドッキリ？本気で言ってる？』

『現実見ろよS級(笑)』

『なあ玲。お前、自分がなんでS級になれたと思ってる？』

『俺たちが徹底的に支援^{ブースト}したからだよ。全てはこの日のためにね』

「は……？ 支援……？」

何を言ってるんだ。お前らが支援してくれたから、ここまで

やってこれたわけで……。

『お前を最強にして、プライドを極限まで肥大化させてから、引きずり落とす。いいプランだろ？』

『俺たちずっと我慢してたんだぜ？ お前のクソみたいな俺様発言も、下手くそなファンサも』

『全部録画して「抜ける素材」として共有してたけどなw』
背筋が凍った。

空中に表示されたウィンドウから滝のように流れるコメントは、もはや俺のファンが言う台詞じゃなかった。

悪意の群れだ。

俺は縫るように、古参リスナーの名前を叫んだ。

「み、御影！ お前だけは違うよな!？」

『御影:¥5,000,000 は？ 何が？』

画面に、漆黒のアイコンと金色の枠で囲まれた御影からのスーパーチャットが表示された。

『うわw ここで御影を呼び出すとは』

『御影が一番ヤバイというのにww』

やばい？ どういう意味だ。

御影は俺が配信スタートした頃からずっと応援してくれてた最古参だ。

衣装や髪型、リスナーへの売り込み方、一から十まで俺を育て上げてくれた大恩人だ。

『玲ちゃんのお部屋に盗撮カメラ仕込んでる奴だぞ』

『スニーカーレベルの執着www』

待て、盗撮？

私生活を全部に見られてた。

——じゃあ、もしかして『アレ』も見られたってことか？

俺は必死に頭を振って、嫌な予想を振り切ろうとした。

けど、コメントは容赦なく続く。

『御影：あー、この企画の発起人、俺だけど？　ずーっとお前の泣き顔が見たかったんだよね。頼むよ、俺が育てた最高の玲ちゃん』

「あ……」

口元から、力が抜けた。

一番信頼していた最古参が、一番の裏切り者だった。

「影から支える」と言ってくれたあの言葉は、俺を操り人形として支配するという意味だったのか。

彼らは最初から、俺という「極上のオモチャ」を壊して遊ぶために、俺を育てていたのだ。

「ふ、ぎけ……んな……ッ！！」

理解したくない。認めたくもなかった。

だが拘束された四肢の痛みと、眼前に迫るオークの鼻息が、逃げ場のない現実を突きつけてくる。

俺は、もう「神代玲」という人間ではない。こいつらに奉仕するだけのモノになり果ててるってことを――。

「嘘だ！　こんなの認めない」

俺の拒絶を無視して、御影のコメントが弾むように流れる。

『御影：はいはい、駄々っ子はそこまで。さあお前ら、お待ちかねのプログラム発表と行こうか！』

ドローンからファンファーレのような効果音が鳴り響き、俺の目の前に巨大なホログラムウィンドウが表示される。

そこには『S級探索者・神代玲陥落プログラム』という禍々しいタイトルが踊っていた。

『御影：第一部は【羞恥の洗礼】！　S級のプライドをへし折るために、今まで隠し通してきた“あの秘密”を全世界に公開処刑しちゃいまーす！』

『よっ！　待ってました！』

『このために有給とった』

『はよ見せろ』

コメント欄が一斉に沸き立つ。

俺は嫌な予感に股を閉ざそうとするが、鎖がそれを許さない。
やめろやめろやめろ。

——『アレ』だけは知られたくない。今のこいつらに知られ
ちゃけないのに！

『御影：第二部は、【耐久！魔力感度 3000 倍調教】だ。玲く
んの魔力回路を媚薬生成回路に書き換えるウイルス魔法、
もうインストール済みだから。頑張って耐えてねw』

御影のコメントに他の古参リスナーが応じる。スパチャを知
らせる通知音が無人のボス部屋に響き渡った。

『¥600,000 あれだろ？ 魔法使えば使うほど、脳ミソ焼
かれる快感が走るって寸法よ。S 級サマなら、きっとイイ声で
鳴いてくれんだろうな～』

「な、に……？ 回路を書き換え……？」

そんなことできるはずがない。

でも、現にリスナーたちの要望で身に着けた本日の装備品
は、俺の全身を締め付ける拘束具に変化していた。

初めて見るリスナーたちの煽りコメントの数々に俺は呆然と
するしかなかった。

『御影：そしてメインイベント！ 第三部は【視聴者参加型!?
変異種オークによる無制限種付けショー】だ！』

もはや配信の主導権は逆転していた。

場を支配しているのは俺じゃない。御影だった。

「——狂ってる……」

『御影：みんな正気だ、安心しろ。お前の“S級回復力”を利用して、オークの精力が尽きるまで……いや、お前が妊娠して腹がパンパンになるまで、永遠に中出しされ続けてもらうから』

『¥2,000,000 今回は俺らも“特等席”で楽しませてもらうからな。覚悟しとけよ？』

「特等席……？」

一般人であるリスナーがダンジョンに入れるわけがない。なのに参加するだと？

だが、御影たちの意味深な言葉について考える余裕は、もう俺にはなかった。

『御影：さあ、それじゃあ始めようか。玲ちゃん、カメラに笑顔でピース……は無理だから、その可愛い身体で挨拶しようね』

次の瞬間、ボス部屋の地面が激しく揺れた。

部屋の奥に広がる暗闇から、鼻をつく悪臭と共に、無数の「影」が湧き出した。

一つ、二つじゃない。

豚の鳴き声が幾重にも重なり、空間を埋め尽くす。

最初に現れたのは、通常個体より遥かに巨大なボス級の変異種オーク《マナ・イーター》。

だが、絶望はそれで終わりではなかった。

後ろから、同じような巨体オークたちが、まるで軍隊のように次々と姿を現したのだ。

四体、五体、いや十体以上……。

ギラつく無数の瞳が、一斉に俺の身体を品定めするように見つめている。

「ひッ……来るな！」

ボス部屋の入り口付近、閉ざされた扉を背に、俺は逃げることもできず、大股開きの体をさらしていた。

『聖女の贖罪』の鎖によって固定されたまま、迫りくるオークの群れから必死に身をよじって、あとずさる。

だが鎖のせいですぐ元の体勢に戻ってしまう。逃げ場などなかった。

そしてオークの一体が、俺の目の前まで歩み寄ると、長い舌でベロリと頬を舐め上げた。

「あゝ!? つ、ざけんな……離れろ!!」

必死に首を振って拒絶する俺の顎を、オークの太い指がガシリと掴む。

万力のような力で無理やり上向かされ、俺は息を呑んだ。

「ん、ぐ……!？」

逃げ場を失った俺の唇に、オークの分厚い唇が押し付けられた。

「んーっ！ むぐっ、んんッ！！」

ただの捕食行動ではない。ヌルリとした長い舌が口内へ強引に侵入し、俺の舌を絡め取り、歯列をなぞり、唾液を混ぜ合わせる濃厚な口づけ。

獣の悪臭の中に、なぜか抗えない「雄」の匂いと、熟練した舌使いのテクニックが混じり、俺の背筋をゾクリとさせる。

「ふ、んぐう……っ、やあ……っ！」

口内をくまなく味わい尽くされ、ねっとりとした上顎を擦られる快感に、思わず腰がビクリと跳ねる。

酸素を奪われて意識が朦朧とし始めた頃、ようやく唇が離された。

銀色の糸が、俺とオークの口の間でだらしく伸びる。

呆然とする俺の無防備な姿を見て、コメント欄が加速した。

『やば、今の糸引いた顔エロすぎ』

『オーク相手にトロトロになってて草』

『嫌がってるくせに口の中あんなに開発されてんのかよww』

『ごちそうさまです。これだけで飯3杯いけるわ』

俺の絶望とは裏腹に、リスナーたちは熱狂し、投げ銭の音が止まらない。

オークたちの手で鎖の拘束がほどかれるが、自由になったわけではない。代わりに、彼らの剛腕によって直接捕らえられた。

「……っ、手、離せよ……！ この豚野郎！」

すると俺を取り囲んだオークたちが、一斉に腰囊をまくり上げた。

露わになったのは、どす黒く脈打つ、子供の腕ほどもある巨大なイチモツたちだった。

先端から我慢汁を滴らせたその凶器が、俺の目の前に何本も立ちふさがる。

凶悪な質量に、本能的な恐怖で身がすくんだ。

「ひっ、や、待て……！ そんなの、無理だ……！」

だがオークたちはお構いなしだった。俺の髪を背後からガンリと掴んだ。

「あッ!? 痛っ、…っ！ やめろ、髪にこすりつけ……ン

なッ！！」

前髪を引っ張られ、強制的に竿に頬を擦り付けられる『髪コキ』。

鼻先を亀頭が掠め、雄臭い匂いが肺まで満たす。

オークは興奮したように腰を前後させ、俺の頭を自身の性欲処理道具として扱い始めた。

「あ、ああ……ッ！かみ、汚れる……ッ！」

先端から溢れ出る生臭い粘液が、俺が毎日手入れを欠かさなかった自慢の黒髪に、べっとりと擦り付けられた。

透明だった粘液は次第に白く濁り始め、さらさらだった黒髪が無残に汚されていく。

時折、ドロリとした亀頭が頬や瞼に吸い付くような感触があり、そのたびに俺は恐怖で悲鳴を上げた。

「ひいッ…離せええッ！！」

『うわあ、S級の綺麗な黒髪がオーク汁でギトギトwww』

『オークの高級トリートメント効いてるねえ』

『潔癖症の玲ちゃんが顔中ザーメンまみれとか興奮するわ』

『そのまま顔射、決めちまえ』

リスナーたちの挑発的で加虐心あふれるコメントが、俺の絶望を肴にさらに過激になっていく。

俺の意思などお構いなしに、黒い前髪が汚され、蹂躪され続けた。

「やだ……ア……もお、やめろお……っ」

別のオークが俺の腕を強引に持ち上げると、無防備な脇の下に自身のイチモツを挟み込んだ。

ザラついた竿が柔らかい脇肉をこねるように前後し、敏感な肌を蹂躪する『脇コキ』。

「あ、や……脇、だめっ、こすれるうッ！！」

必死に腕を閉じようとするが、オークの圧倒的な筋力には敵わなかった。

むしろその抵抗が締め付けとなり、オークを喜ばせている。

さらに足元では、別のオークが俺のブーツを無理やり脱がしにかかっていた。

露わになった俺の素足。

その足裏に鼻を押し付け、変態的な呼吸と共にフンフンと匂いを嗅ぎ、ざらつく舌で土踏まずを舐め上げた。

「ひゃっ!? 足、なめ……んなっ！ くすぐったい……！」

全身くまなくオークたちの性欲処理に使われる S 級探索者。

その光景に、コメント欄は阿鼻叫喚の盛り上がりを見せていく。

『脇コキ助かる』

『S級の足裏とかご褒美すぎるだろ』

『足フェチオーク分かってるなww』

『徹底的に「穴」以外も使い潰す気満々で草』

逃げようともがくほど、髪を引かれ、脇を犯され、足を汚される。

親子ほどもある体格差と数の暴力。俺の身体はあっという間に蹂躪されていく。

やがてオークたちの動きが示し合わせたように激しくなり、喉の奥から低い唸り声が漏れ始めた。

「グオオオオオッ！！」

「ひゃ、あッ!? い、やあああッ……！！」

四方八方からの同時発射。

顔面には熱い粘液が叩きつけられた。

脇の下ではドロリとした液体が溢れ出し、素足は白濁した汚泥で塗れていく。

視界が白く染まるほどの量が、俺の全身を汚し尽くした。

「げほっ、ごほッ……、…ッ」

精液まみれになり、無様に咳き込む俺の姿。

かつてのS級探索者の尊厳など見る影もない。

それを見て、コメント欄が爆発的な速度で流れていく。

『俺も出たわwww』

『ごちそうさま。玲ちゃんの無様顔サイコー』

『S級探索者(笑)がおかずにされてらあ』

『おかげでスッキリしました^^』

白濁した粘液が、金色の鎖と白い聖布にべっとりと張り付き、俺の肌の輪郭をいやらしく強調していた。

「はあ、はあ……もう、十分だろ……？ これ以上は……」

震える声で許しを乞う。だが、そんな俺の甘い考えを嘲笑うかのように、システムウィンドウが赤く明滅した。

ショーはまだ終わらない。むしろ、前座が終わったに過ぎなかった。

【クエスト条件達成:目標達成額 6 億円を達成】

【リスナー権限により、衣装パージモード』を起動します】

直後、ぱちんっ！と弾ける音がした。

俺の股間を辛うじて隠していた白い布が、奴らの操作によって弾け飛んだ。

「——っ!？」

やめろ。見るな。見るんじゃない！

俺は必死に足を閉じるも、カメラは無残にも俺の恥部を映し出していた。

『おいおい、マジかよこれ……』

『竿が、ない……？』

鍛え上げられた腹筋と逞しい太ももの間に、そこだけあまりに不釣り合いな未開発の秘所があった。

恐怖と興奮で分泌された蜜が、太ももを伝って肌に光る筋を描いている。

完璧なS級探索者「神代玲」という偶像を作り上げるために積み上げてきた全ての努力。

その全てが、今、無慈悲に暴かれた。

股間にはあるべきはずの男性器がなく——代わりに、愛液で濡れてひくつく女性器のような裂け目が、卑猥に口を開けていた。

「あ、う……見、るな……」

高性能なドローンカメラが、獲物を見つけた猛禽類のように降下し、その恥ずべき部分を執拗にズームアップする。

「や、め……撮るな、寄るなッ！ やめろおおおッ！！」

ドローンカメラは毛穴ひとつ、粘膜のひだまで超鮮明に映し

出す高性能レンズだった。

連中のモニターの向こうで、数百万人の視線が俺の股間に釘付けになっていた。

『うっわマジじゃんww想像以上にエロい形してる』

『都市伝説だと思ってたのにwwwツルツルじゃん』

『俺様キャラでカントボーイとかエッツッ』

『今までこの穴隠して「俺様」とか言ってたの？興奮するわ』

『スクショした』

『録画余裕、一生のオカズにするわ』

『ねえ今どんな気持ち？全国に自分の一番恥ずかしい穴見せびらかしてどんな気持ち？』

「あ……あ、あ……」

顔から血の気が引き、指先が震える。

目の前に迫るオークに見下ろされる恐怖よりも、社会的な死への絶望が勝った。

俺が築き上げてきた地位、名誉、そして「最強の男」としてのプライド。

それらが音を立ててガラガラと崩れ去り、ただの「種付けを待つメス」へと転落していく。

「見るな……、消せ……頼むから、消せえ……ッ！！」

涙目で首を振り、必死に両足で秘部を隠そうとするが、オークの怪力でこじ開けられたままではどうしようもない。

その無様で哀れな懇願すらも、オークたち、そしてモニターの向こうの捕食者たちにとっては、食欲をそそるスパイスでしかなかった。

彼らは興奮したように鼻息を荒くし、さらなる陵辱を求めてギラついた目を向けてくる。



それから先は地獄だった。

俺の意思など関係ない。全てはリスナーの財布次第だ。

『¥300,000 まずは前戯。オークさん、クリ弄りお願いします』

指示通りに、オークの太い指が俺の敏感な突起をこね回す。その指の動きは、ただの野獣にしてはあまりにもいやらしく、的確だった。

「ここかなあ？ ほら、ここ弱いんだろ？ すげえ……指先に吸い付いてきやがるw」

「ひグツ!? あ、あぁっ……や、め、そんなとこ……ッ！」